

# 少子社会にもとめられる「家族」と働き方

— 「少子化対策」と「子育て支援」の混同 —



明治大学政治経済学部 教授

明治大学附属明治高等学校・明治中学校 校長

安藏 伸治 (Ph. D.)

I わが国の少子化の推移

II 少子化の本当の原因

III わが国の家族の変化

IV 「いい人」がない

V 結婚市場への対応

VI 少子化対策の「誤解」と本当に

求められる政策

## 自己紹介

あんぞう しんじ  
安 藏 伸 治

明治大学政治経済学部 教授

明治大学付属明治高等学校・明治大学付属明治中学校 校長

1976年 明治大学政治経済学部卒業

1978年 明治大学大学院政治経済学研究家博士前期課程修了（経済学修士 M.A.）

1984年 M. A. (Sociology: University of Southern California)

1985年 M. S. (Applied Demography: University of Southern California)

1985年 Ph. D. (Sociology: University of Southern California)

人口学専攻（結婚と離婚に関する要因分析，配偶者選択行動，少子化の要因と動向，ライフコースと家族のあり方，応用人口学）。  
社会調査法。統計学。

日本人口学会理事・元会長。

内閣府有識者会議委員

少子化危機突破タスクフォース（I期・II期・森大臣），新たな少子化社会対策大綱策定のための検討会（有村大臣）。

三重県経営戦略会議委員。

学校法人明治大学評議員。学校法人谷岡学園評議員。学校法人国本学園監事。

# I わが国の少子化の推移

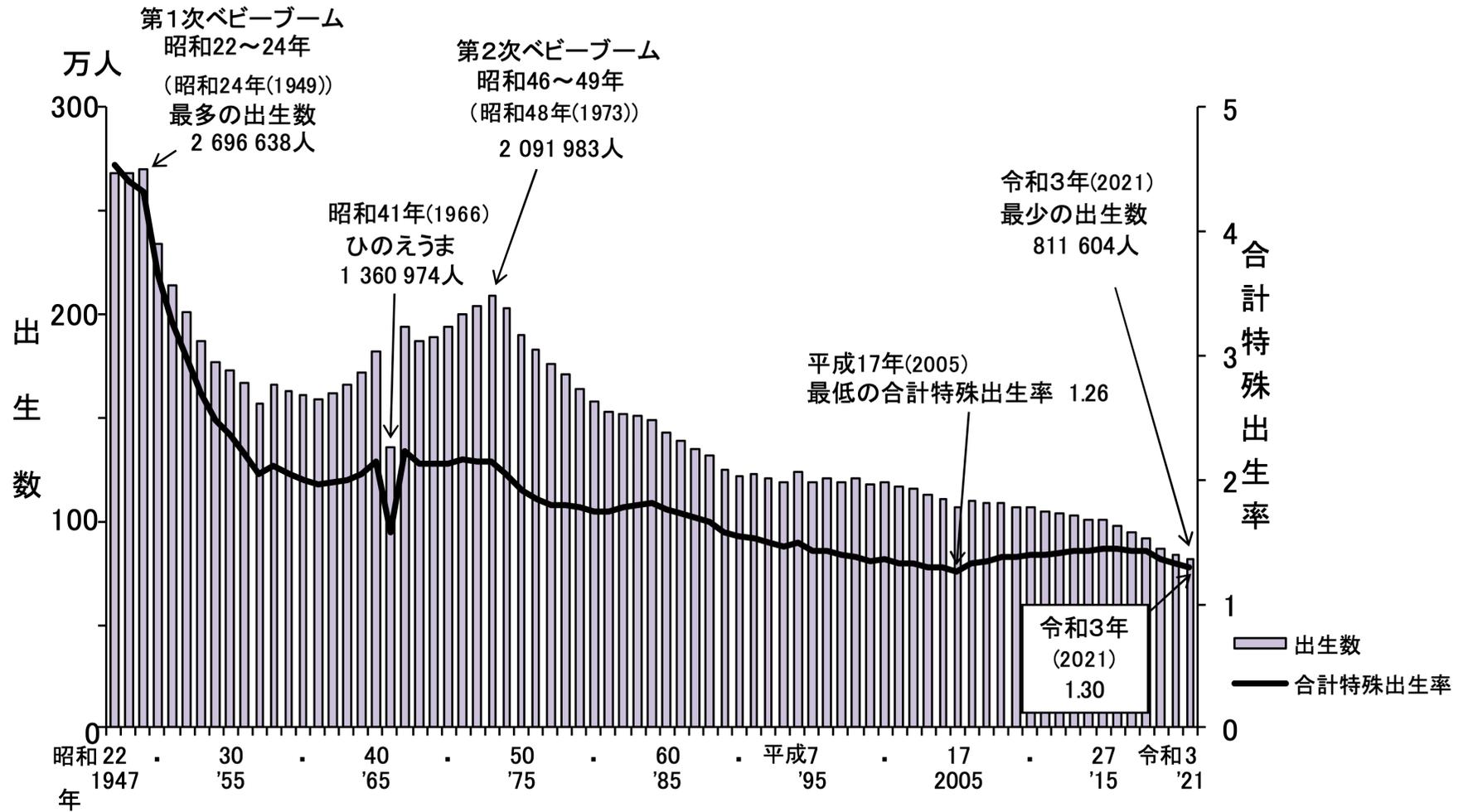


図1 出生数及び合計(特殊)出生率の年次推移

出典；厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課編 2021年『令和3年 人口動態統計月報年計(概数)の概況』4頁。

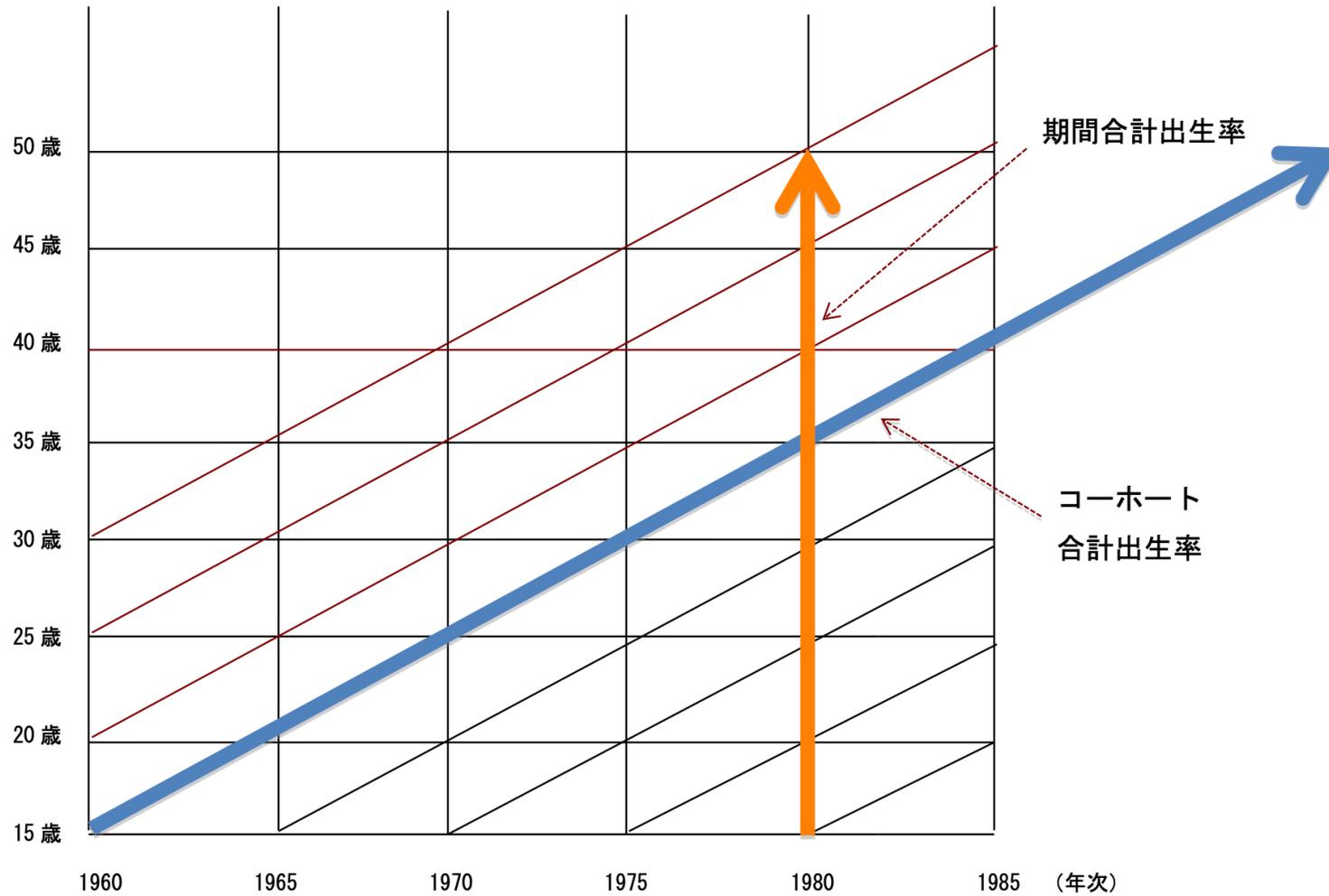


図2 期間合計出生率とコーホート合計出生率の関係

表1 女性のコーホート別累積出生率：1950～2015年

年齢	1950年	1955年	1960年	1965年	1970年	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年
15	0.00032	0.00008	0.00006	0.00005	0.00012	0.00005	0.00006	0.00013	0.00012	0.00019	0.00033	0.00036	0.00038	0.00034
16	0.00143	0.00053	0.00043	0.00031	0.00043	0.00047	0.00062	0.00083	0.00078	0.00097	0.00188	0.00167	0.00167	0.00133
17	0.00518	0.00221	0.00206	0.00185	0.00223	0.00212	0.00285	0.00296	0.00286	0.00371	0.00623	0.00506	0.00492	0.00357
18	0.01462	0.00753	0.00751	0.00686	0.00807	0.00657	0.00880	0.00795	0.00760	0.00961	0.01364	0.01203	0.01093	0.00741
19	0.03485	0.02115	0.02163	0.01979	0.02243	0.01722	0.02180	0.01866	0.01870	0.02250	0.02819	0.02499	0.02235	0.01478
20	0.07519	0.05102	0.05416	0.04945	0.05043	0.03897	0.04336	0.03739	0.03703	0.04410	0.04891	0.04442	0.03892	0.02575
21	0.14343	0.10627	0.10526	0.10706	0.10004	0.07760	0.07647	0.06684	0.06417	0.07406	0.07793	0.07030	0.06133	
22	0.24196	0.20203	0.21340	0.20907	0.17819	0.13978	0.12342	0.10702	0.10083	0.11218	0.11365	0.10110	0.08780	
23	0.39044	0.34408	0.37236	0.36555	0.29606	0.23397	0.19010	0.16041	0.14936	0.15731	0.15855	0.13881	0.11991	
24	0.56941	0.52906	0.58131	0.56798	0.45418	0.36554	0.27856	0.23394	0.21011	0.21162	0.21212	0.18395	0.15931	
25	0.76780	0.74661	0.82016	0.78424	0.63982	0.52395	0.38718	0.32132	0.28580	0.27578	0.27743	0.24103	0.20776	
26	0.96882	0.90644	1.06710	1.00032	0.83853	0.69905	0.51578	0.42521	0.37339	0.35321	0.35491	0.31013		
27	1.16269	1.12819	1.29921	1.20094	1.03688	0.87865	0.65465	0.53864	0.46973	0.44148	0.44380	0.39266		
28	1.34101	1.31813	1.50460	1.38125	1.22316	1.05185	0.79385	0.65876	0.57199	0.53993	0.54338	0.48876		
29	1.49630	1.47999	1.66888	1.53309	1.39015	1.20477	0.93515	0.77679	0.67830	0.64520	0.65072	0.59156		
30	1.63135	1.61155	1.78786	1.65360	1.52837	1.34048	1.05917	0.88999	0.78002	0.75092	0.76254	0.69600		
31	1.70612	1.71390	1.87503	1.74686	1.63818	1.45466	1.17165	0.99141	0.88126	0.85545	0.87215			
32	1.79191	1.79163	1.94001	1.82080	1.72554	1.54821	1.26659	1.08081	0.97635	0.95648	0.97678			
33	1.85592	1.85194	1.98836	1.87904	1.79458	1.62300	1.34668	1.15813	1.06380	1.05175	1.07438			
34	1.90360	1.89226	2.02292	1.92346	1.84621	1.68474	1.41050	1.22526	1.14275	1.14057	1.16071			
35	1.93796	1.91778	2.04743	1.95545	1.88546	1.73075	1.46317	1.28088	1.21259	1.22226	1.23806			
36	1.96261	1.93521	2.06566	1.97909	1.91452	1.76714	1.50460	1.32914	1.27220	1.29250				
37	1.97917	1.94664	2.07853	1.99551	1.93545	1.79300	1.53495	1.36816	1.32179	1.34998				
38	1.99107	1.95469	2.08811	2.00724	1.94976	1.81179	1.55765	1.39920	1.36267	1.39602				
39	1.99844	1.96003	2.09473	2.01527	1.96044	1.82465	1.57428	1.42318	1.39524	1.43110				
40	<u>2.00288</u>	<u>1.96349</u>	<u>2.09897</u>	<u>2.02055</u>	<u>1.96712</u>	<u>1.83356</u>	<u>1.58506</u>	<u>1.44034</u>	<u>1.41955</u>	<u>1.45637</u>				
41	2.00550	1.96568	2.10163	2.02378	1.97131	1.83901	1.59237	1.45175	1.43609					
42	2.00706	1.96707	2.10314	2.02566	1.97371	1.84229	1.59703	1.45884	1.44594					
43	2.00792	1.96782	2.10405	2.02668	1.97506	1.84403	1.59961	1.46298	1.45131					
44	2.00832	1.96822	2.10445	2.02726	1.97575	1.84493	1.60092	1.46505	1.45375					
45	2.00852	1.96839	2.10461	2.02748	1.97606	1.84537	1.60146	1.46595	1.45484					
46	2.00859	1.96845	2.10469	2.02757	1.97619	1.84552	1.60170							
47	2.00862	1.96847	2.10472	2.02761	1.97624	1.84560	1.60178							
48	2.00864	1.96848	2.10473	2.02763	1.97627	1.84563	1.60184							
49	2.00864	1.96849	2.10474	2.02765	1.97631	1.84568	1.60196							

国立社会保障・人口問題研究所『人口問題研究』による。表4-10の出生率を累積したもの。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2022年『人口統計資料集 2022年度版』。

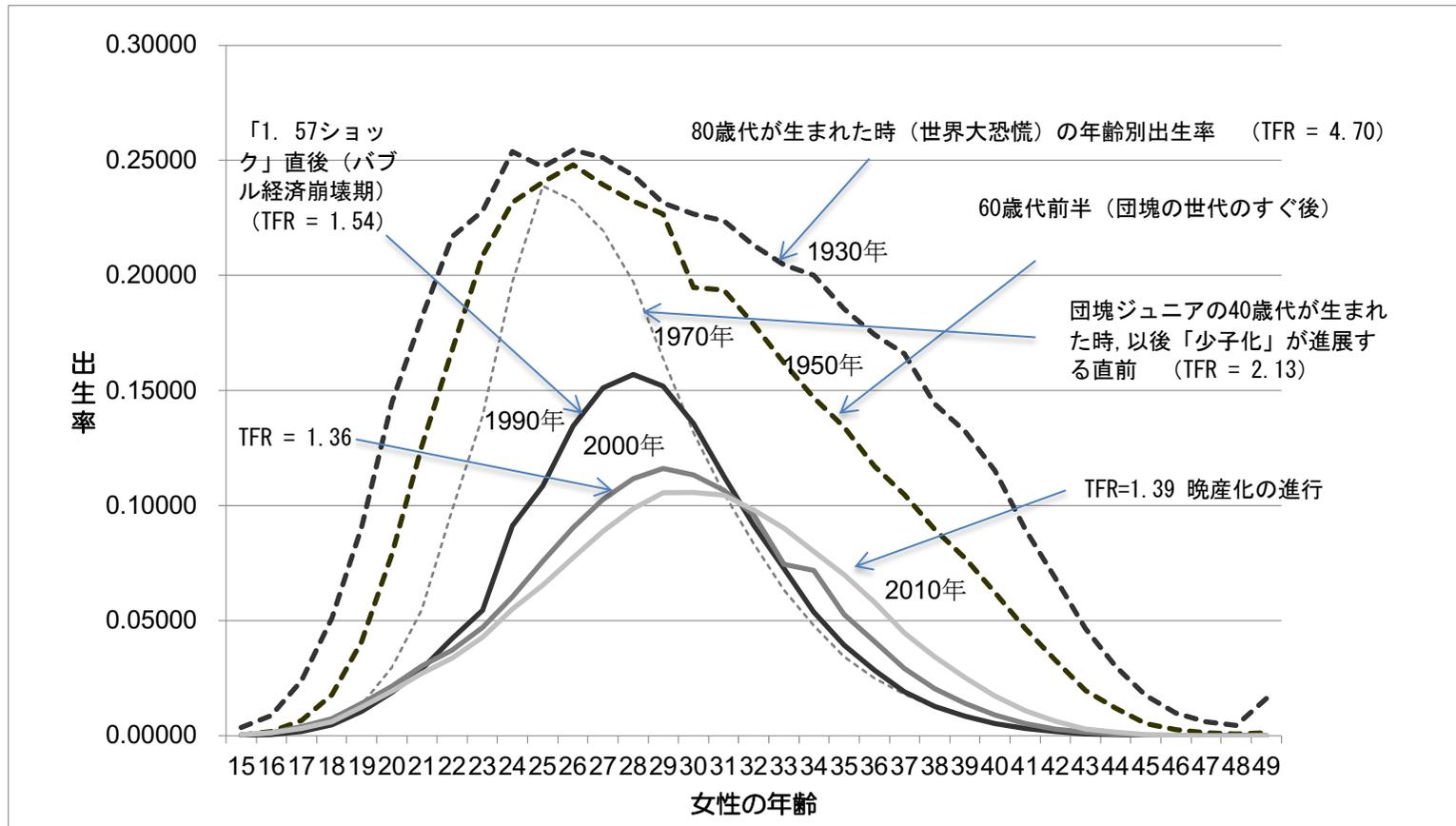


図2 年齢別出生率の推移：1930年、1950年、1970年、1990年、2000年および2010年

年齢別出生率 = ある年齢の女性から生まれた子ども数 ÷ その年齢の女性人口 (× 1,000)

出所：国立社会保障・人口問題研究所、『人口統計資料集 2013』より作成。

## II 少子化の本当の原因

表2 嫡出でない子の出生数および割合：1920～2020年

年次	嫡出でない子	割合(%)	年次	嫡出でない子	割合(%)	年次	嫡出でない子	割合(%)
1920	167,011	8.25	1983	13,862	0.92	2002	21,631	1.87
1925	151,448	7.26	1984	14,747	0.99	2003	21,634	1.93
1930	134,221	6.44	1985	14,168	0.99	2004	22,156	1.99
1935	125,170	5.71	1986	13,398	0.97	2005	21,533	2.03
1940	86,820	4.10	1987	13,138	0.98	2006	23,025	2.11
1947	101,580	3.79	1988	13,324	1.01	2007	22,170	2.03
1950	57,789	2.47	1989	12,826	1.03	2008	22,972	2.11
1955	29,018	1.68	1990	13,039	1.07	2009	22,860	2.14
1960	19,612	1.22	1991	13,592	1.11	2010	22,986	2.15
1965	17,452	0.96	1992	13,738	1.14	2011	23,354	2.22
1970	17,982	0.93	1993	13,665	1.15	2012	23,138	2.23
1975	15,266	0.80	1994	14,716	1.19	2013	22,790	2.21
1976	14,207	0.78	1995	14,718	1.24	2014	22,854	2.28
1977	13,812	0.79	1996	15,453	1.28	2015	23,035	2.29
1978	13,164	0.77	1997	16,659	1.40	2016	22,407	2.29
1979	12,857	0.78	1998	17,204	1.43	2017	21,102	2.23
1980	12,548	0.80	1999	18,280	1.55	2018	21,041	2.29
1981	13,201	0.86	2000	19,436	1.63	2019	20,171	2.33
1982	13,076	0.86	2001	20,369	1.74	2020	20,040	2.38

厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当）『人口動態統計』による。1947～72年は沖縄県を含まない。割合は、出生総数に対するもの。

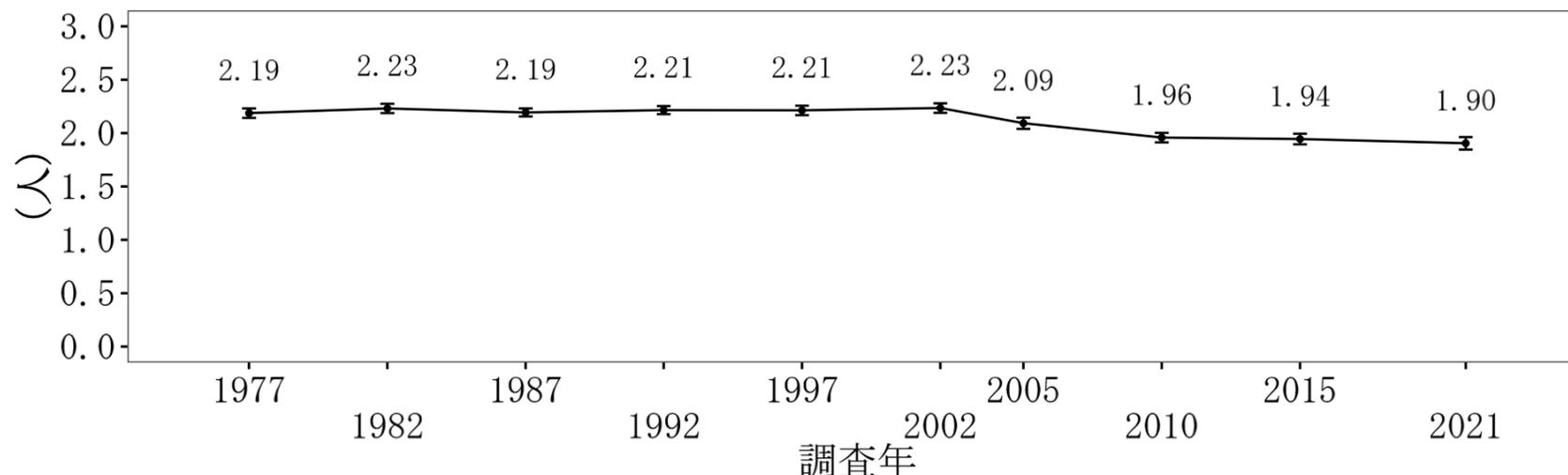
出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2022年『人口統計資料集 2022年度版』。

表3 有配偶女性の年齢（5歳階級）別出生率：1930～2015年

年齢	1930年	1950年	1960年	1970年	1980年	1990年	2000年	2005年	2010年	2015年	2020年
15～19	337.7	408.0	321.9	245.8	384.3	497.9	674.2	698.0	814.1	819.8	784.9
20～24	336.4	376.3	341.7	346.4	352.1	332.1	359.7	363.5	386.1	394.2	360.1
25～29	280.4	298.6	237.2	258.9	243.3	241.8	230.1	225.4	239.2	247.9	230.4
30～34	235.9	209.6	92.7	95.0	82.9	112.3	136.0	136.7	157.3	175.9	169.6
35～39	181.0	126.3	27.8	22.0	14.3	23.7	40.2	49.1	66.3	83.0	81.8
40～44	83.6	43.7	6.4	3.1	1.9	2.7	4.6	6.4	11.1	15.7	16.8
45～49	13.6	2.9	0.5	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.3	0.4	0.5
15～49 <sup>1)</sup>	208.8	187.5	108.7	104.5	77.8	66.0	76.7	74.9	79.4	80.5	73.0

1930年は内閣統計局『日本帝国人口動態統計』，1950年以降は厚生労働省政策統括官（統計・情報政策、労使関係担当）『人口動態統計』および総務省統計局『国勢調査報告』により算出。1950～70年は沖縄県を含まない。率算出の分母人口は，1975年以前は総人口，80年以降は日本人人口。年齢および配偶関係不詳は按分し，2015年以降は配偶関係不詳補完結果を用いた。1) 再生産年齢有配偶女性人口についての出生率で，年齢別有配偶出生率の平均的な値。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2022年『人口統計資料集 2022年度版』。

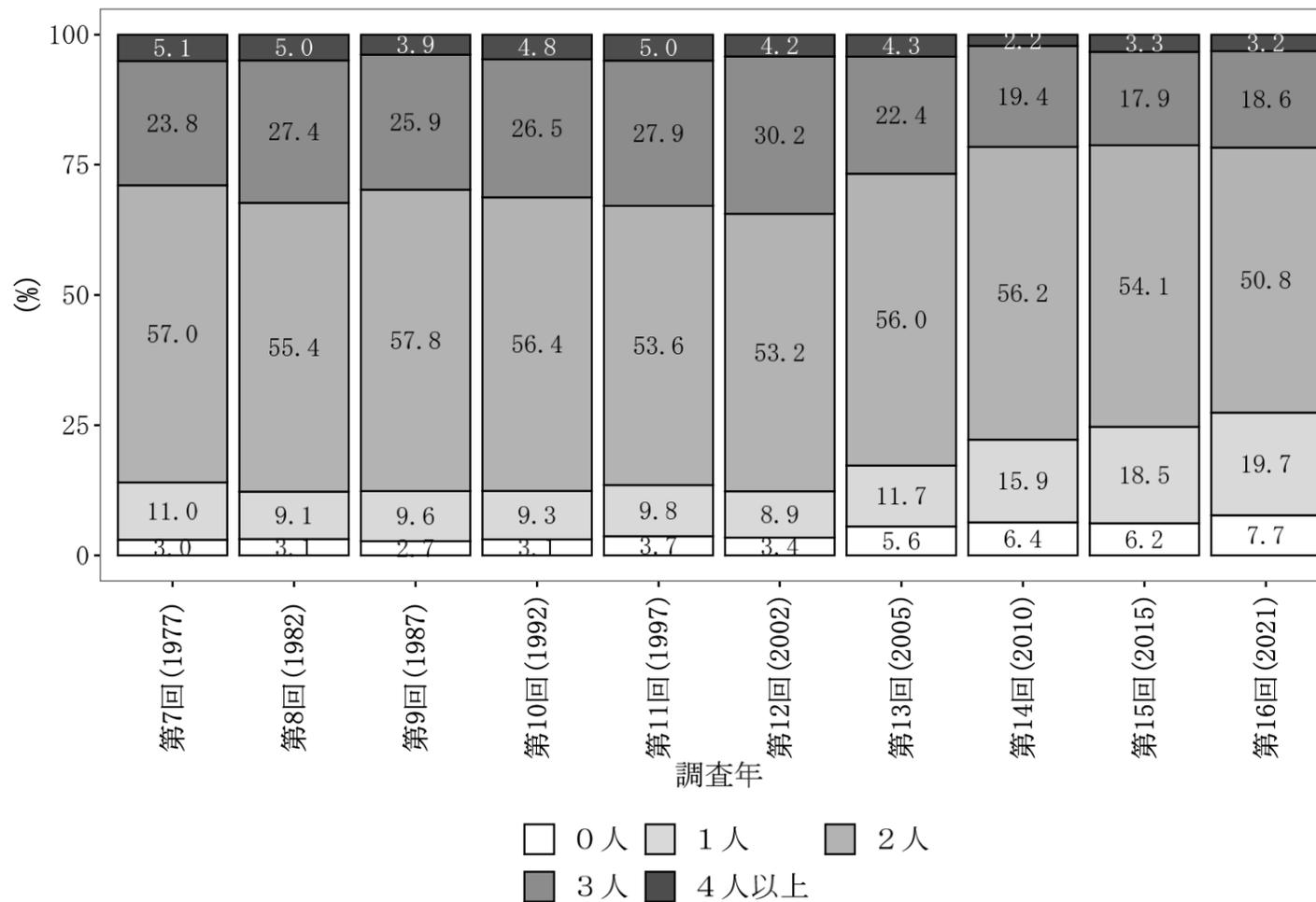


注：対象は結婚持続期間15～19年の初婚どうしの夫婦。第15回以前は妻の調査時年齢50歳未満、第16回は妻が50歳未満で結婚し、妻の調査時年齢55歳未満の夫婦について集計。出生子ども数不詳を除き、8人以上を8人として平均値を算出。図中のマーカー上のエラーバーは95%信頼区間を示している。第16回（2021）について、前回までと同様に妻の年齢50歳未満（結婚年齢35歳未満）で集計した場合は、1.99。ここには妻が30～34歳で結婚した一部と35歳以上で結婚した夫婦が含まれない。客体数は、第7回（1977）1,427、第8回（1982）1,429、第9回（1987）1,755、第10回（1992）1,849、第11回（1997）1,334、第12回（2002）1,257、第13回（2005）1,078、第14回（2010）1,385、第15回（2015）1,232、第16回（2021）948。各集計対象の平均初婚年齢は以下の通り：第7回（1977）23.9歳、第8回（1982）23.9歳、第9回（1987）23.9歳、第10回（1992）24.2歳、第11回（1997）24.8歳、第12回（2002）25.1歳、第13回（2005）25.4歳、第14回（2010）25.8歳、第15回（2015）26.1歳（いずれも初婚年齢35歳未満）、第16回（2021）27.0歳（初婚年齢35歳未満）、27.8歳（初婚年齢40歳未満）。

【概要版図表6-1 調査別にみた、夫婦の完結出生子ども数（結婚持続期間15～19年）】

図3 調査別にみた、夫婦の完結出生子ども数（結婚持続期間15～19年）

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2021年 『結婚と出産に関する全国調査 -第16回出生動向基本調査 結果の概要』43頁。



注：対象は結婚持続期間15～19年の初婚どうしの夫婦。第15回以前は妻の調査時年齢50歳未満、第16回は妻が50歳未満で結婚し、妻の調査時年齢55歳未満の夫婦について集計。出生子ども数不詳を除く。第16回について妻の年齢50歳未満に限定した場合、0人（5.5%）、1人（18.1%）、2人（52.9%）、3人（20.2%）、4人以上（3.4%）。

【概要版図表6-2 調査別にみた、夫婦の出生子ども数の分布（結婚持続期間15～19年）】

図4 調査別にみた、夫婦の完結出生子ども数の分布（結婚持続期間15～19年）

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2021年 『結婚と出産に関する全国調査 -第16回出生動向基本調査 結果の概要』43頁。

- ・ 図2の年齢別出生率は、「分子」に「ある年齢の女性から生まれた子ども」  
「分母」に「ある年齢の女性人口」

↑  
独身者と有配偶者を含む

わが国では、表2で見るように「嫡出でない子の出生割合」は全出生の2%と低い。

つまり、実質的な出生は、「結婚している女性が生んだ子」と「結婚している女性人口（有配偶女性）」からなりたっている。

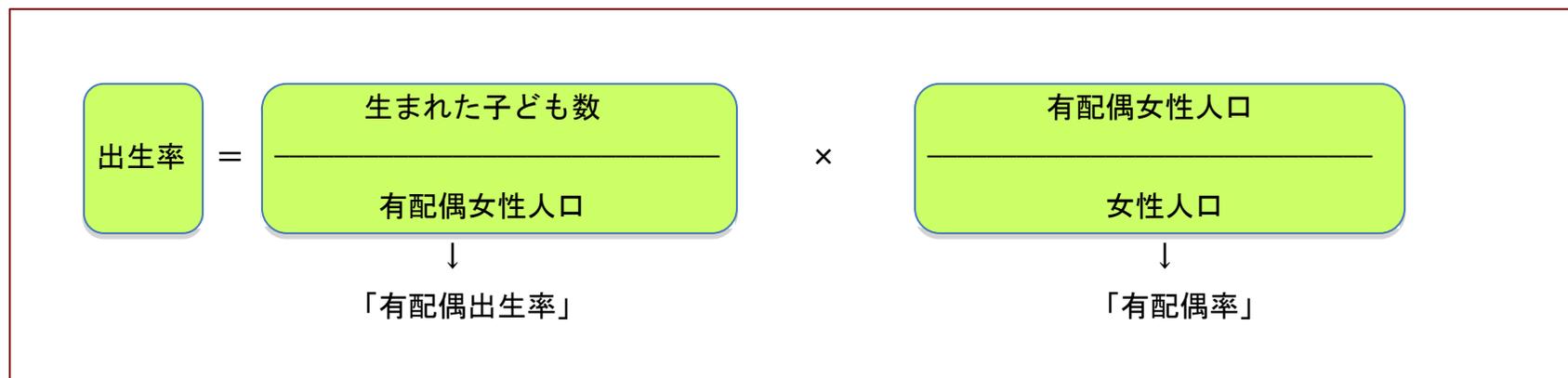


表3ならびに図3と図4をみるとわが国の「有配偶出生率」に大きな変化は見られない。

夫婦の「理想子ども数」と「予定子ども数」も変化していない。

上記の式の前項に変化がないとすると、「出生率」の低下は第2項の「有配偶率」の変化が影響していることとなる。

表4 女性の年齢（5歳階級）別未婚者割合：1920～2020年

年齢	1920年	1930年	1950年 <sup>1)</sup>	1960年 <sup>1)</sup>	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2015年*	2020年*
総数 <sup>2)</sup>	18.7	21.2	25.7	26.9	24.9	20.9	23.6	23.9	23.3	24.1	24.8
15～19	82.3	89.3	96.6	98.6	97.9	99.0	99.3	99.1	99.4	99.4	99.6
20～24	31.4	37.7	55.3	68.3	71.7	77.8	86.0	88.0	89.6	91.8	93.0
25～29	9.2	8.5	15.2	21.6	18.1	24.0	40.4	54.0	60.3	63.2	65.8
30～34	4.1	3.7	5.7	9.4	7.2	9.1	13.9	26.6	34.5	36.6	38.5
35～39	2.7	2.4	3.0	5.5	5.8	5.5	7.5	13.9	23.1	25.5	26.2
40～44	2.1	1.8	2.0	3.2	5.3	4.4	5.8	8.6	17.4	20.5	21.3
45～49	1.9	1.6	1.5	2.1	4.0	4.5	4.6	6.3	12.6	17.1	19.2
50～54	1.7	1.4	1.2	1.7	2.7	4.4	4.1	5.3	8.7	12.7	16.5
55～59	1.5	1.3	1.2	1.3	2.0	3.5	4.2	4.3	6.5	8.8	12.2
60～64	1.4	1.1	1.2	1.1	1.6	2.4	4.2	3.9	5.5	6.6	8.5
65～69	1.4	1.0	1.3	1.0	1.3	1.7	3.4	4.0	4.5	5.6	6.4
70～74	1.4	0.9	1.3	1.0	1.1	1.3	2.3	4.0	4.0	4.6	5.4
75～79	1.4	0.8	} 1.5	1.1	1.1	1.0	1.7	3.3	4.0	4.1	4.4
80～84	1.3	0.7		1.0	1.0	0.9	1.3	2.3	4.1	4.0	3.9
85歳以上	1.4	0.7	1.2	0.9	1.0	0.7	1.0	1.6	2.9	3.6	3.8

総務省統計局『国勢調査報告』による。年齢別人口（配偶関係不詳を除く）に占める割合。\*配偶関係不詳補完結果に基づく。

1) 沖縄県を含まない。2) 15歳以上。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2022年『人口統計資料集 2022年度版』。

表5 男性の年齢（5歳階級）別未婚者割合：1920～2015年

年 齢	1920年	1930年	1950年 <sup>1)</sup>	1960年 <sup>1)</sup>	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年	2015年*	2020年*
総 数 <sup>2)</sup>	29.3	32.3	34.3	34.8	32.4	28.6	31.4	32.1	31.9	33.4	34.6
15～19	97.2	99.0	99.5	99.8	99.3	99.7	99.7	99.5	99.7	99.6	99.7
20～24	70.9	79.6	82.9	91.6	90.1	91.8	93.6	92.9	94.0	95.3	95.7
25～29	25.7	28.7	34.5	46.1	46.5	55.2	65.1	69.4	71.8	74.6	76.4
30～34	8.2	8.1	8.0	9.9	11.7	21.5	32.8	42.9	47.3	49.8	51.8
35～39	4.1	3.9	3.2	3.6	4.7	8.5	19.1	26.2	35.6	37.3	38.5
40～44	2.8	2.4	1.9	2.0	2.8	4.7	11.8	18.7	28.6	31.9	32.2
45～49	2.3	1.8	1.5	1.4	1.9	3.1	6.8	14.8	22.5	27.4	29.9
50～54	2.0	1.5	1.4	1.1	1.5	2.1	4.4	10.3	17.8	22.1	26.6
55～59	1.8	1.4	1.2	1.0	1.2	1.6	3.0	6.1	14.7	17.7	21.6
60～64	1.7	1.2	1.2	0.9	1.0	1.2	2.0	3.9	10.3	14.8	17.3
65～69	1.5	1.0	1.3	0.9	0.9	0.9	1.4	2.6	6.1	10.3	14.1
70～74	1.5	0.9	1.4	0.9	0.9	0.8	1.0	1.7	3.8	6.0	9.6
75～79	1.4	0.9	2.0	1.0	0.9	0.7	0.8	1.2	2.4	3.6	5.2
80～84	1.2	0.7	} 2.0	1.0	1.1	0.7	0.7	0.9	1.6	2.2	3.0
85歳以上	1.5	0.7		1.1	1.2	0.7	0.7	0.8	1.0	1.3	1.6

総務省統計局『国勢調査報告』による。年齢別人口(配偶関係不詳を除く)に占める割合。\*配偶関係不詳補完結果に基づく。

1) 沖縄県を含まない。2) 15歳以上。

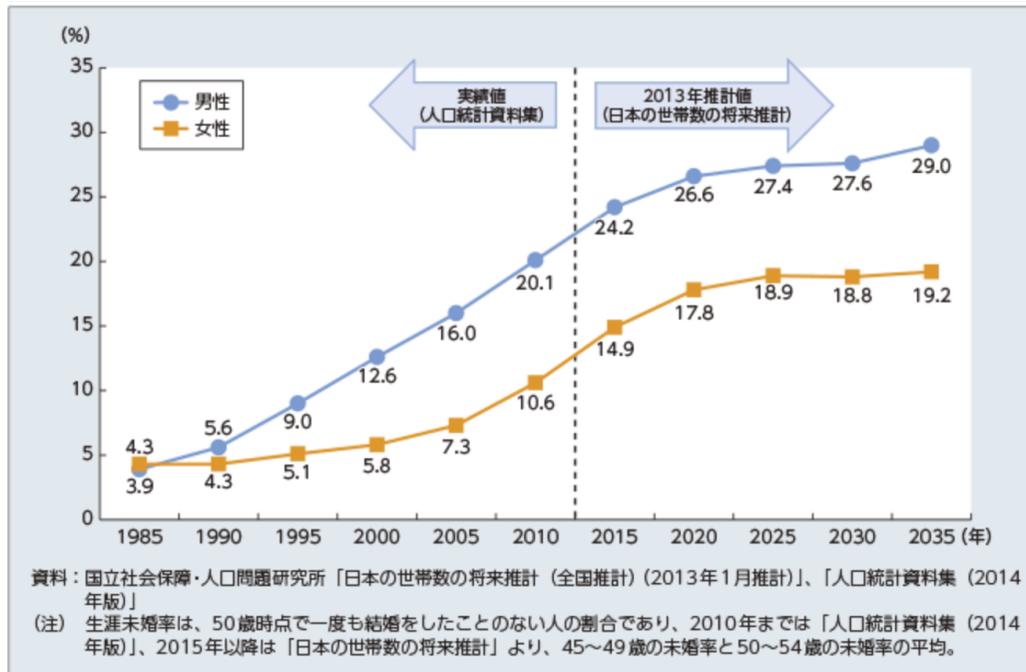
出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2022年『人口統計資料集 2022年度版』。

表6 性別生涯未婚率および初婚年齢（SMAM）：1920～2010年

年次	男		女		年次	男		女	
	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)		生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)	生涯未婚率 (%)	初婚年齢 (歳)
1920	2.17	25.02	1.80	21.16	1970	1.70	27.46	3.34	24.65
1925	1.72	25.09	1.61	21.18	1975	2.12	27.65	4.32	24.48
1930	1.68	25.77	1.48	21.83	1980	2.60	28.67	4.45	25.11
1935	1.65	26.38	1.44	22.51	1985	3.89	29.57	4.32	25.84
1940	1.74	27.20	1.46	23.33	1990	5.57	30.35	4.33	26.87
1950	1.45	26.23	1.35	23.61	1995	8.99	30.68	5.10	27.69
1955	1.18	27.05	1.47	24.69	2000	12.57	30.81	5.82	28.58
1960	1.26	27.44	1.88	24.96	2005	15.96	31.14	7.25	29.42
1965	1.50	27.41	2.53	24.82	2010	20.14	31.18	10.61	29.69

総務省統計局『国勢調査報告』により算出。SMAM (Singulate mean age at marriage)は、人口静態統計の年齢別未婚率から計算する平均初婚年齢であり、次式により計算する。SMAM=( $\sum Cx-50 \cdot S$ )/(1-S)。ただし、Cxは年齢別未婚率、Sは生涯未婚率。生涯未婚率は、45～49歳と50～54歳未婚率の平均値であり、50歳時の未婚率。

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2013年『人口統計資料集 2013年度版』。



### 生涯未婚率の推移

出典：厚生労働省『平成26年版厚生労働白書』

表7 第1子出生時の母の平均年齢の年次推移

	昭和50年 (1975)	60 ( ' 85)	平成7年 ( ' 95)	17 (2005)	27 ( ' 15)	28 ( ' 16)	29 ( ' 17)	30 ( ' 18)	令和元年 ( ' 19)	2 ( ' 20)	3 ( ' 21)
平均年齢 (歳)	25.7	26.7	27.5	29.1	30.7	30.7	30.7	30.7	30.7	30.7	30.9

出典；厚生労働省大臣官房統計情報部人口動態・保健社会統計課編 2021年『令和3年 人口動態統計月報年計(概数)の概況』5頁。

表8 体外受精による出生児数ならびに総出生児数、そして総出生児数に占める体外受精による出生児数の割合

年	体外受精実施件数の年次推移 (万件)	体外受精出生児数 (万人)	出生数に対する体外受精出生児数の割合
2004	11.7	1.8	1.6%
2005	12.5	1.9	1.8%
2006	13.9	2.0	1.8%
2007	16.1	2.0	1.8%
2008	19.1	2.2	2.0%
2009	21.4	2.7	2.5%
2010	24.2	2.9	2.7%
2011	27.0	3.2	3.1%
2012	32.6	3.8	3.7%
2013	36.6	4.3	4.1%
2014	39.4	4.7	4.7%
2015	42.4	5.1	5.1%
2016	44.8	5.4	5.5%

資料：体外受精実施件数及び体外受精出生児数 公益社団法人日本産科婦人科学会ホームページ。

出生数 厚生労働省政策統括官付参事官付人口動態・保健社会統計室「人口動態統計」

出生数に対する体外受精出生児の割合は、上記資料より厚生労働省政策統括官付政策評価官室作成。

(注) 体外受精の実施件数及び体外受精出生児数は、IVF（体外受精）を用いた治療数、ICSI（顕微授精）を用いた治療数、凍結胚（卵）を用いた治療数の合計。公益社団法人日本産科婦人科学会の集計による。

出典：厚生労働省 <https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/18/backdata/01-01-02-10.html>

2019年には6万598名 14.3人に1人の割合に

「嫡出でない子の割合」が非常に少ない（表2）わが国では、



女性の未婚者割合の増加（表4）、つまり「未婚化」が「少子化」の主因と考えられる。



「未婚化」が更に進行していけば、「非婚化」（表6）が進行し、「再生産」に係らない人達が多くなって行く。

また、初婚年齢に上昇つまり「晩婚化」に伴う出産年齢の上昇（表7）は、



「第3子出生」を減少させ、



ついで「第2子出生」へと影響していく。

平均初婚年齢が「30歳」に近づいてきており、同世代の約半数の女性は30歳以降に「再生産」を行うことになる。



「晩産化」が更に進行していけば、



不妊治療が増加していく（表8）。

### III わが国の家族の変化

第二次大戦前 ← きょうだいが4人, 5人, 多い人では7人から8人。

← 避妊の実践なし。

← 有配偶女性が再生産年齢期間を通して子ども生んでいた時代。

→ 長男以外の男性は就職や進学により成長すると自立。女性は結婚により離家。

きょうだい数という人口圧力により, 経済的に独立するか, 他家あるいは夫へと経済的に依存する相手に移行

1940年代末の第一次ベビーブーム以降, 1960年代へ至る10年間

→ 高出生から低出生へ出生力転換を達成。

→ 合計出生率は, 次世代の人口規模を親の世代と同じ規模に保つために必要な「人口置換水準(2.08)」まで低下。

→ いわゆる「二子規範」が世帯構成の主流。

この時期から1970年代入るまでの期間

→ わが国の経済が急速に発展。

→ 世帯収入の改善や生活水準の上昇, 子どもの教育水準の上昇などが進展。

→ 専業主婦割合も増加(『平成13年度版 国民生活白書』)

全有配偶女性に占めるサラリーマン世帯の専業主婦の割合は, 1955年に29.9%であったが, 高度経済成長とともに増加し, 1960年に33.2%, 1965年に36.3%, 1970年に36.4%まで上昇。

→ 父が主たる働き手で, 母が専業主婦, そして子どもが2人という, いわゆる「標準世帯」が家族の一般的な形態

こうした時代が, 1960年頃から80年に至る時期まで続く

→ 勤労世帯に対しての配偶者控除, 扶養手当, 年金, 健康保険等の金額や保険料の算出のモデルケースとなる世帯構造。

→ 戦後のわが国の家族の基本的なイメージを形成し「戦後家族」(落合恵美子, 2002)と呼ばれた家族類型。

## 戦後社会の大きなターニングポイント → 1973年のオイルショック

- 1973年10月に第四次中東戦争が勃発。
- 石油輸出国機構（OPEC）に加盟していた産油国が原油価格の引き上げ。
- 列島改造ブームによる地価高騰などでインフレが進行していた日本経済は、このオイルショックにより物価高騰に拍車がかかり、「狂乱物価」というような状況に陥ってしまった。
- わが国経済をこれまで引っ張ってきた製鉄や造船という「重厚長大」型の産業に陰りが見え始め、次第に「軽薄短小」型のハイテク型の産業や、「サービス」型の産業に産業構造が移行。
- 経済的な環境の変化は、わが国の家族の在り方にも影響をもたらすようになってきた。

## 「戦後家族」の変化 → 「父親がブレッドウィナーであり、母親は家事労働の専従」からの変化

- ← 産業構造の転換により、これまで優位を保ってきた男性の稼得能力が変化。
- ← 熟練性や年功を必要としないサービス産業の隆盛により、男性の相対的経済的地位が低下し、「重厚長大」型産業ではリストラが発生（上野，1994）。
- ← 家計補助的に母親が拡大されたサービス産業の労働市場に参入し、パートタイム就業を行うようになった。
- ← しかし、家庭内の性別役割分業に関しては、母親は家事労働のほとんどを担う。
- 労働統計上はパートタイム就労という労働力でありながら、所得税控除や家族扶養手当が受給できる範囲内での雇用調整を行い、家庭内では専業主婦としての役割の二役を演じるという、いわゆる「準専業主婦」（落合，2004）。



こうした状況を背景に、全有配偶女性に占めるサラリーマン世帯の専業主婦の割合は、その後1980年に37.1%まで増加しそれをピークに、1990年には28.1%、2000年には26.5%まで減少（経済企画庁，2001）。

第2次ベビーブーム → 1971年から1974年までの期間に、1940年代末に毎年270万人が生まれた第1次ベビーブーム世代の女性達が、年間約200万人の子どもを生む。

→ しかし1973年を境にわが国の出生率は、「人口置換水準」を割り込み、以降継続的に低下し続ける。

1970年代中頃以降、女性の高学歴化も急激に進展

→ 1970年から1975年の間に間に女子の短大進学率は11.2%から20.2%に、大学学部への進学率は6.5%から12.7%へと急激に上昇した（文部科学省，2008）。

→ 1985年には男女雇用機会均等法が制定され女性の就業機会はより一層拡大。

→ 経済的自立が可能であっても、少子社会ゆえに親との同居が許される時代となったのである。こうした状況のもと彼女たちは、結婚相手選択に十分に時間をかけることが可能となった（安藏，2008）。

1980年代後半 ← 不動産や株式などの資産価格が投機などによって異常に上昇したバブル経済の時代が到来。

→ 高等教育への進学の新増、大企業による新卒者の大量採用、大幅な賃金の上昇が起こった。

→ 未婚化は大きく進展。

→ 1980年代半ばを境にわが国の未婚化、晩婚化、非婚化が大きく進行。

結婚行動の変化 ← 青年層を取り巻く家族の在り方が大きく影響

← 母親の多くがパートタイム労働に従事するようになっても、家庭内の役割は専業主婦であり、父親は家計の主たる稼得者として朝から夜まで家をあけることになる。

← 「二子規範」ゆえに、戦前のような家庭内人口圧力もない。

← 成人後も父親の経済環境の中で生活し、母親から家庭サービスを享受し続けていくことが成人子にも可能な状態。

← 1995年の国勢調査によると、20歳から39歳の未婚男性の62.7%が、未婚女性の74.2%が親と同居（総務省統計局，2000）。

- ← 未婚男性と未婚女性にとっては、母親から居心地の良い家庭サービスを受けることができ、経済的には父親から援助を受けることができる理想的な環境。
- ← 男性は母親のような伝統的役割分担を行ってくれる女性を求め、更に加齢し、経済的に社会的にも地位が高くなるにつれ、よりそうした考えを強くしていく。
- ← 女性もまた、自分の両親が与えてくれるような経済環境と家庭サービスを提供し、あるいは協力して自分たちの家庭を築いてくれるような男性を求める。
- ← 加齢し経済的に自立できるようになれば、より一層、理解ある男性を求めることになる。こうした男女の結婚観や価値観の乖離が結婚を躊躇させることとなる（安藏，2008）。

#### IV 「いい人」がない — 男女間における結婚に関する意識の相違 —

より良い結婚 ← 理想的な結婚相手 (Assortative Mating), 満足いく結婚 (Satisfactory Marital Match), 良縁 (Good Match)



同質的な特質をもつ相手を選ぶ傾向。

- ← 社会生物学的同質性 (Socio-biological Homogamy) → 年齢や人種
- サブ・カルチャーとしての同質性 (Sub-cultural Homogamy) → 民族性や言語
- 社会経済的同質性 (Socioeconomic Homogamy) → 社会経済的地位や所得, 教育水準など



- ・ 男女双方, ときには双方の両親の類似した特質を有する人を求める傾向。
- ・ 互いの補完的の価値観が一致したしていることが必要。
- ・ もし両者の間に異質性が存在するならば, それを調整。



結婚後の適応的社会化 (Adaptive Socialization) が求められる。



適応的社会化が不可能 → よりよい相手を求め結婚相手選択過程により時間をかける傾向がある。



結婚が延期される。

表9 男女別・年齢別の結婚してもよいと思う手取り月収(品川区調査)

質問：あなたは、配偶者と自分の収入を合わせて、手取りでどのくらいあれば結婚してもよいと思いますか。

	回答者数	20万円 未満	20～30万 円未満	30～40万 円未満	40～50万 円未満	50～60万 円未満	60～70万 円未満	70万円 以上	わから ない
男性 20～24歳	100%(標本数38)	-	13.2%	26.3%	21.1%	13.2%	5.3%	10.5%	10.5%
25～29歳	100%(標本数53)	-	11.3%	37.7%	24.5%	13.2%	-	5.7%	7.5%
30～34歳	100%(標本数36)	2.8%	5.6%	36.1%	25.0%	16.7%	-	2.8%	11.1%
35～39歳	100%(標本数31)	-	12.9%	38.7%	25.8%	9.7%	-	3.2%	9.7%
40歳以上	100%(標本数21)	-	4.8%	33.3%	42.9%	9.5%	-	4.8%	4.8%
総数	100%(標本数179)	0.6%	10.1%	34.6%	26.3%	12.8%	1.1%	5.6%	8.9%
女性 20～24歳	100%(標本数64)	-	3.1%	21.9%	31.3%	20.3%	6.3%	3.1%	14.1%
25～29歳	100%(標本数80)	-	6.3%	20.0%	23.8%	27.5%	8.8%	3.8%	10.0%
30～34歳	100%(標本数37)	-	2.7%	10.8%	27.0%	18.9%	24.3%	0.0%	16.2%
35～39歳	100%(標本数33)	-	3.0%	9.1%	27.3%	15.2%	15.2%	18.2%	12.1%
40歳以上	100%(標本数20)	-	-	5.0%	40.0%	15.0%	15.0%	5.0%	20.0%
総数	100%(標本数275)	-	3.8%	16.2%	28.2%	21.4%	12.0%	5.1%	13.2%

注：少子化研究会企画・分析，品川区・少子化研究会共同実施，2002年，「少子化に関する区民調査」独身者票から作成。

<データ>

東京都品川区企画部と少子化研究会が厚生労働科学研究費の助成をうけて実施（2002年12月から2003年1月）

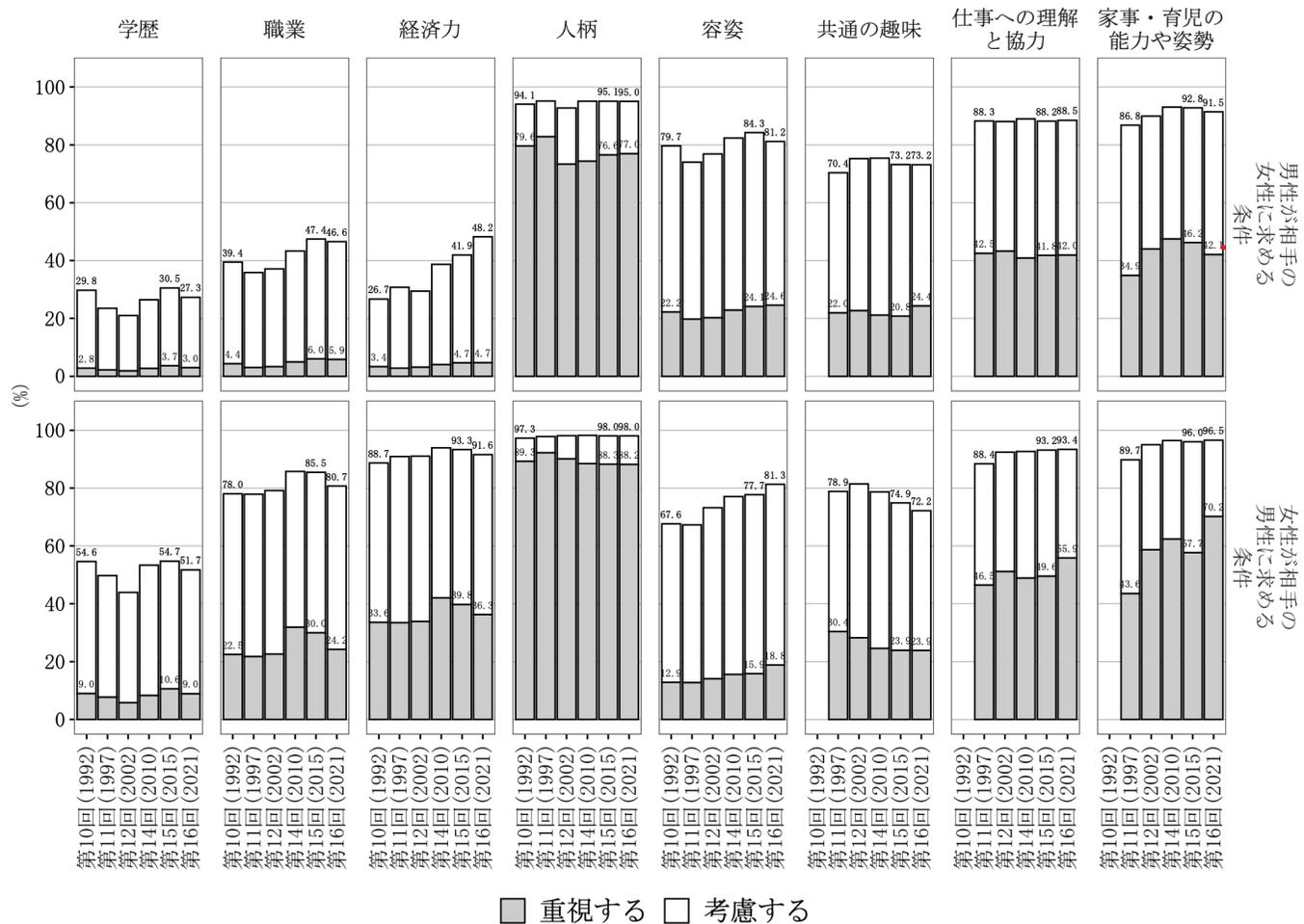
「少子化に関する区民調査」（夫婦票659票，独身者票520票）

独身票のうち未婚者のみのデータを抽出 → 男女の結婚観の相違をみる

品川区 → 男女とも教育水準・所得水準が他の地域と比較して非常に高い。女性の回答者全体の43.9%が大学を卒業

20歳から24歳では在学中のものを含め50.0%（男性：75.0%）

20歳代後半では47.7%（男性：61.7%） 30歳代前半で37.5%（男性：65.9%） 30歳代後半で40.0%（男性：57.6%）



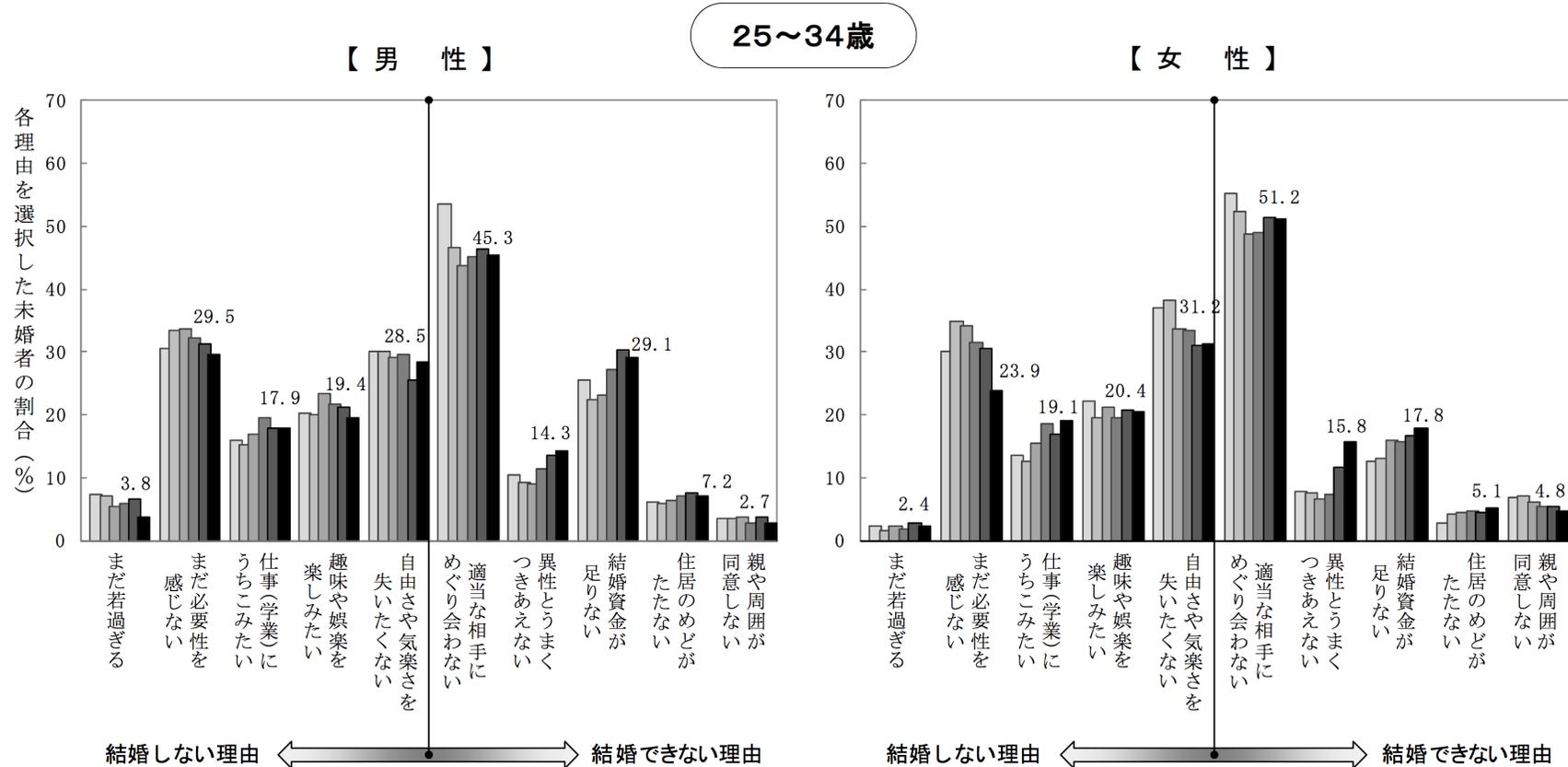
注：対象は「いずれ結婚するつもり」と回答した18～34歳の未婚者。設問「あなたは結婚相手を決めるとき、次の①～⑧の項目について、どの程度重視しますか。」（①相手の学歴（学歴）、②相手の職業（職業）、③相手の収入などの経済力（経済力）、④相手の人柄（人柄）、⑤相手の容姿（容姿）、⑥共通の趣味の有無（共通の趣味）、⑦自分の仕事に対する理解と協力（仕事への理解と協力）、⑧家事・育児に対する能力や姿勢（家事・育児の能力や姿勢））（1. 重視する、2. 考慮する、3. あまり関係ない）。

【概要版図表3-2 調査別にみた、結婚相手の条件として重視・考慮する割合】

図10 調査別にみた、結婚相手の条件として重視・考慮する割合

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2021年 『結婚と出産に関する全国調査 -第16回出生動向基本調査 結果の概要』 33頁。

そして・・・



注：対象は18～34歳の未婚者。何%の人が各項目を独身にとどまっている理由(3つまで選択)として挙げているかを示す。グラフ上の数値は第15回調査のもの。

設問「あなたが現在独身でいる理由は、次の中から選ぶとすればどれですか。ご自分に最もあてはまるとされる理由を最高3つまで選んで、右の回答欄に番号を記入してください(すでに結婚が決まっている方は、「最大の理由」の欄に12を記入してください。)

図11 調査・年齢別にみた、独身にとどまっている理由

出典：国立社会保障・人口問題研究所編 2017年 『現代日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査報告書—』19頁

## V 結婚市場への対応

表 10 平均初婚年齢の推移：1899～2020 年

出典：国立社会保障・人口問題研究所編

2022 年『人口統計資料集 2022 年度版』。

年次	初 婚			年次	初 婚		
	夫	妻	年齢差		夫	妻	年齢差
1899	…	…	…	1986	28.3	25.6	2.7
1900	…	…	…	1987	28.4	25.7	2.7
1905	…	…	…	1988	28.4	25.8	2.6
1910	27.0	23.0	4.0	1989	28.5	25.8	2.6
1915	27.4	23.2	4.2	1990	28.4	25.9	2.5
1920	27.4	23.2	4.2	1991	28.4	25.9	2.5
1925	27.1	23.1	4.0	1992	28.4	26.0	2.4
1930	27.3	23.2	4.1	1993	28.4	26.1	2.3
1935	27.8	23.8	4.0	1994	28.5	26.2	2.3
1940	29.0	24.6	4.4	1995	28.5	26.3	2.2
1947	26.1	22.9	3.2	1996	28.5	26.4	2.1
1950	25.9	23.0	2.9	1997	28.5	26.6	1.9
1955	26.6	23.8	2.8	1998	28.6	26.7	1.9
1960	27.2	24.4	2.8	1999	28.7	26.8	1.9
1965	27.2	24.5	2.7	2000	28.8	27.0	1.8
1966	27.3	24.5	2.8	2001	29.0	27.2	1.8
1967	27.2	24.5	2.7	2002	29.1	27.4	1.8
1968	27.2	24.4	2.8	2003	29.4	27.6	1.8
1969	27.1	24.3	2.8	2004	29.6	27.8	1.8
1970	26.9	24.2	2.7	2005	29.8	28.0	1.8
1971	26.8	24.2	2.6	2006	30.0	28.2	1.8
1972	26.7	24.2	2.5	2007	30.1	28.3	1.8
1973	26.7	24.3	2.4	2008	30.2	28.5	1.8
1974	26.8	24.5	2.3	2009	30.4	28.6	1.8
1975	27.0	24.7	2.3	2010	30.5	28.8	1.7
1976	27.2	24.9	2.3	2011	30.7	29.0	1.7
1977	27.4	25.0	2.4	2012	30.8	29.2	1.7
1978	27.6	25.1	2.5	2013	30.9	29.3	1.7
1979	27.7	25.2	2.5	2014	31.1	29.4	1.7
1980	27.8	25.2	2.6	2015	31.1	29.4	1.7
1981	27.9	25.3	2.6	2016	31.1	29.4	1.7
1982	28.0	25.3	2.7	2017	31.1	29.4	1.7
1983	28.0	25.4	2.7	2017	31.1	29.4	1.7
1984	28.1	25.4	2.7	2017	31.2	29.6	1.7
1985	28.2	25.5	2.7	2017	31.0	29.4	1.5





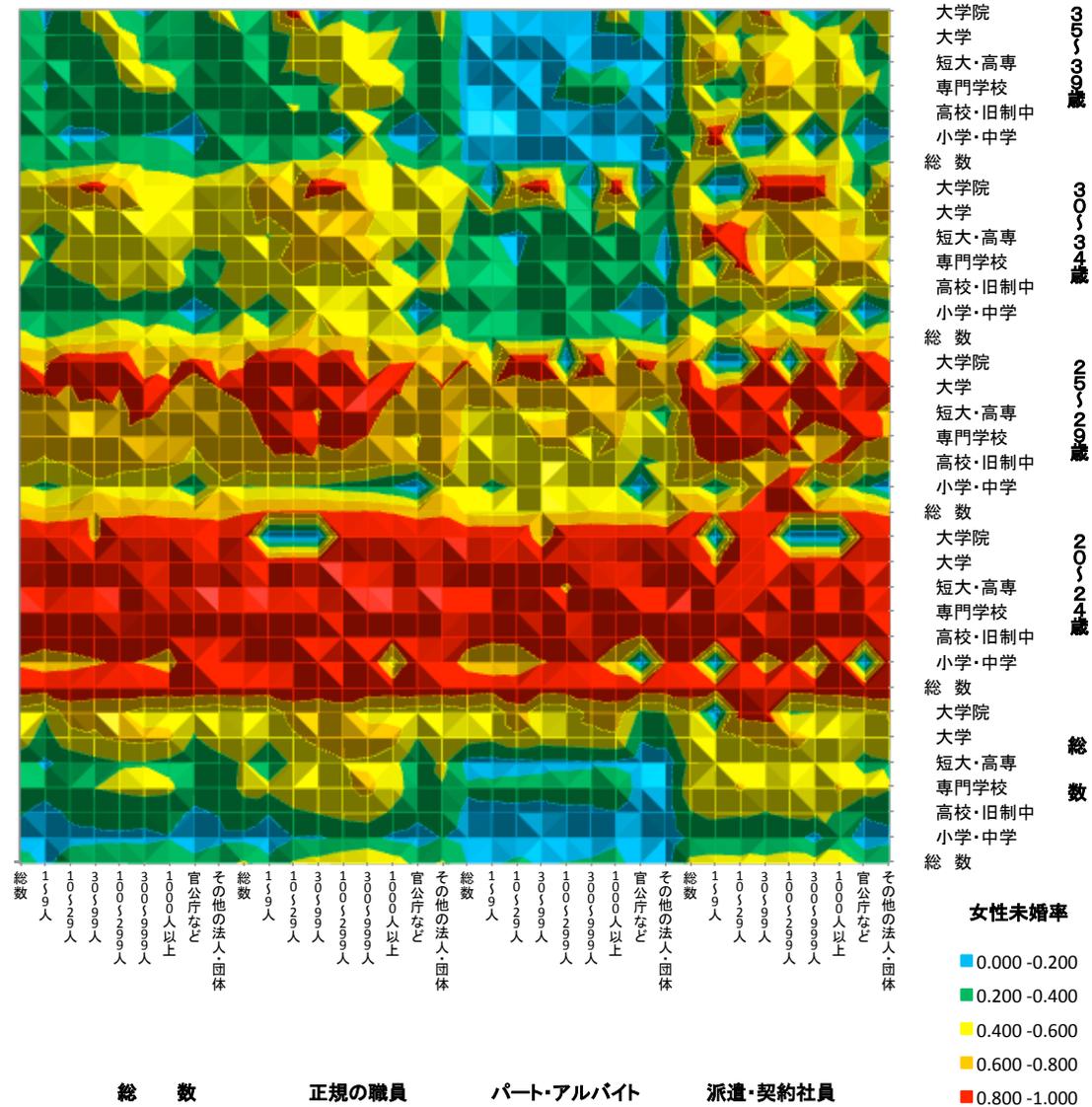


図14 女性の年齢別（20～39歳）、学歴別、就業別、従業員規模別未婚率（『平成19年就業構造基本調査』第14表から）

出典：鎌田健司(2012)「若者の就業行動と婚姻率の低下」小崎敏男、牧野文夫編著『少子化と若者の就業行動(人口学ライブラリー10)』原書房 pp.123-149.

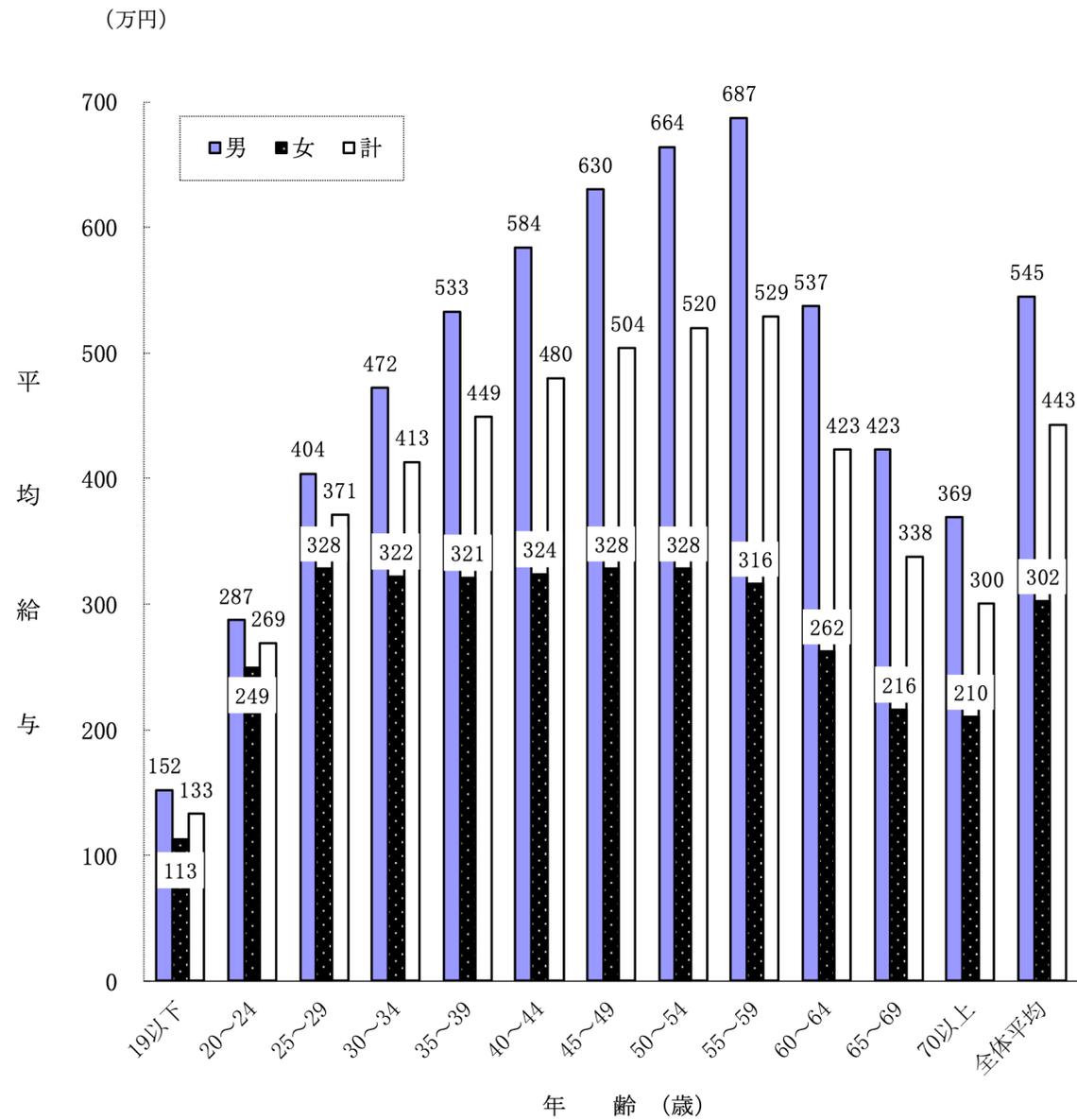


図15 年齢階層別の平均給与（令和3年分）

出典：国税庁長官官房企画課 2022年 『令和3年分 民間給与実態統計調査 -調査結果報告-』, 19頁。

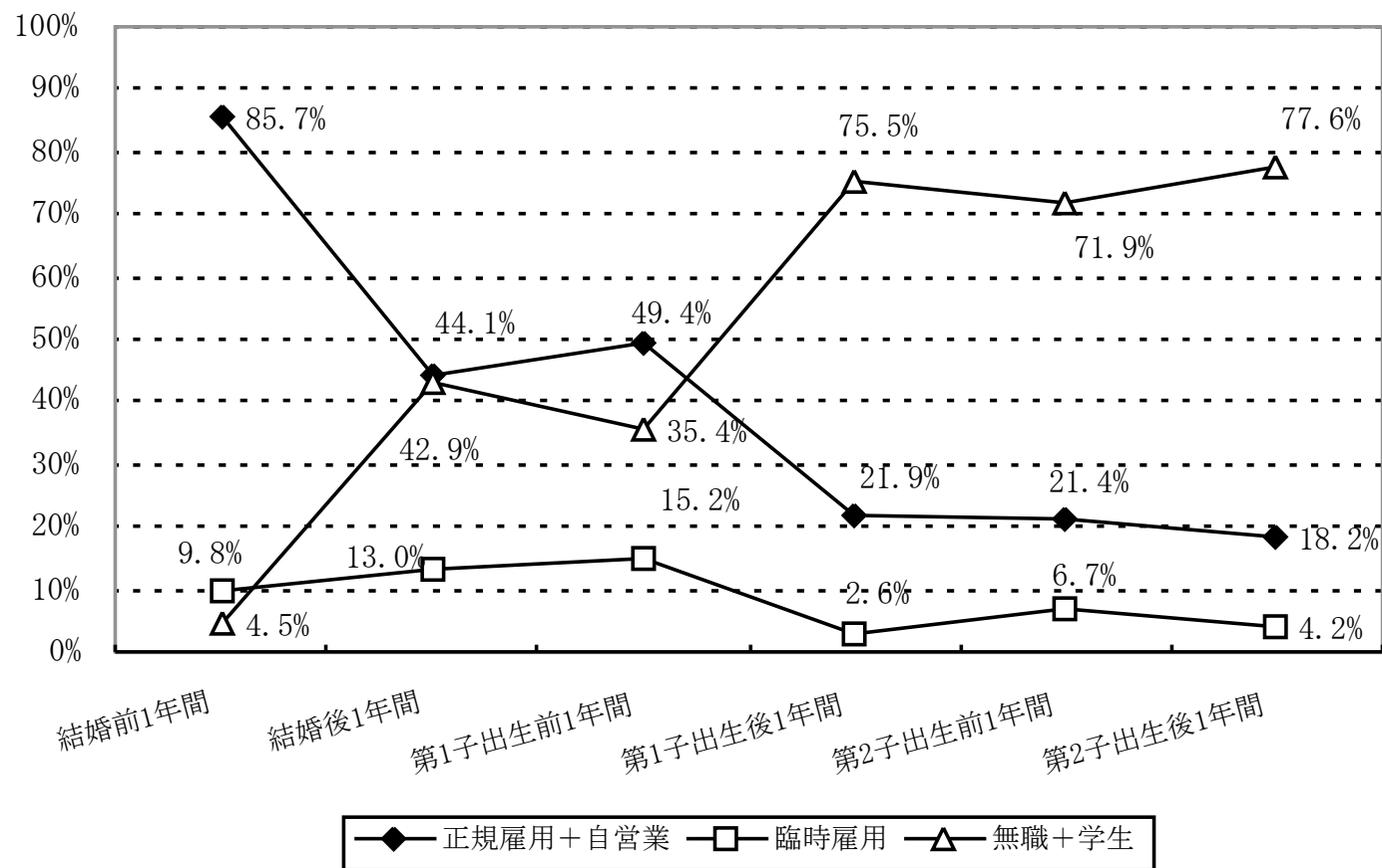


図16 6自治体における少子化調査において第2子出生まで回答している2270ケースのイベントごとの就業形態の変化  
 (「少子化の見通しに関する一般調査」から、東京都品川区、千葉県印旛郡栄町、埼玉県秩父市、岐阜県多治見市、東京都八王子市、そして神奈川県秦野市の6自治体で、第2子出生を経験していると回答した人たちの結婚後の就業状態の変化を示した。)

VI 少子化対策の「誤解」と本当に求められる政策 —新しい「家族」への支援—

表 1 1 期間 TFR の変化に対する初婚行動変化およびそれ以外の変化の影響測定

期間	1975	～	1980	～	1990	～	2000	～	2005	1975	～	2005	
TFR実績値(日本人女性)	1.93		1.74		1.54		1.33		1.24	1.93		1.24	
総変化量		└	-0.20	┘	└	-0.20	┘	└	-0.21	┘	└	-0.69	┘
			(100.0)		(100.0)		(100.0)		(100.0)			(100.0)	
初婚行動の変化に 起因する変化量			-0.16		-0.18		-0.12		-0.07			-0.53	
寄与率(%)			(79.3)		(92.5)		(60.2)		(82.3)			(77.7)	
初婚行動以外の変化 に起因する変化量			-0.04		-0.01		-0.08		-0.02			-0.15	
寄与率(%)			(20.7)		(7.5)		(39.8)		(17.7)			(22.3)	

注：この分析は、1932年～1957年生まれ女性の初婚年齢別出生過程を標準パターンとし、それ以降の世代で初婚行動にのみ現実の変化が生じた場合の TFR をシミュレーションによって求めることにより、TFR 低下における初婚行動変化の影響を測定したものである。初婚行動以外の変化には、夫婦の出生行動および離婚・死別・再婚行動の変化が含まれる。基本的な考え方は岩澤（2002）と同様であるが、今回分析に用いた初婚率および出生率は、日本人女性に発生する初婚及び出生に限定した指標を用いている。また、婚姻の届出遅れ補正を2005年までのデータに基づいておこなったため、2000年以前の結果について数値が変わっている。

出典：岩澤. 2008. 「初婚・離婚の動向と出生率への影響」, 『人口問題研究』64巻, 4号, 23頁。

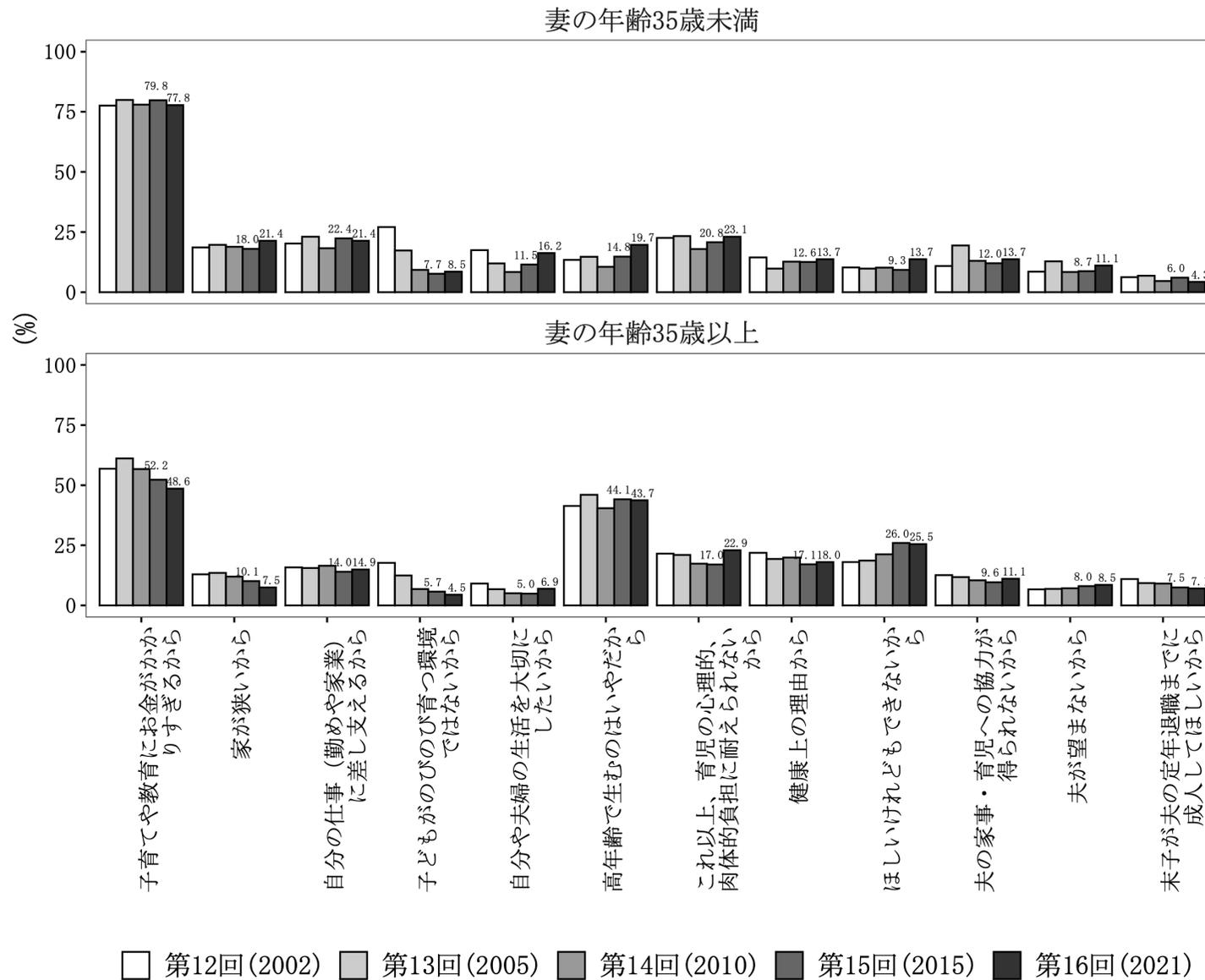


表17 妻の年齢別にみた、理想の数の子どもを持たない理由(予定子ども数が理想子ども数を下回る夫婦): 第16回調査(2010年)

出典: 国立社会保障・人口問題研究所編 2021年 『結婚と出産に関する全国調査 -第16回出生動向基本調査 結果の概要』 59頁。

## 【再考】

- 1 「少子化」 ← 合計出生率が「人口置換水準 (TFR=2.06)」を下回り、継続的に低下すること。
- 2 非嫡出児の出生割合は2%と非常に低い。98%の子どもは両親が結婚してから生まれる。
- 3 有配偶出生率は、「1965年生まれ cohorts 以降に減少傾向」は見られるが、大きな減少はない。



「晩婚化」・「晩産化」の影響 → 「不妊治療」の増加



- 4 「理想子ども数」, 「追加予定子ども数」に大きな変化はなし。「完結出生児数」に若干の低下(1.9)が見られる。
- 5 有配偶女性は「二子規範」を堅持の傾向。
- 6 「少子化」の原因は、第一に再生産年齢の女性の「未婚化」、第二に「晩婚化」・「晩産化」といえる。
- 7 「未婚化」・「晩婚化」・「非婚化」への変化は1980年代半ばからみられる。時代背景、家族の変化が影響か。
- 8 「未婚化」・「晩婚化」・「非婚化」の背景には、男女の結婚後の生活に関する考え方、価値観の相違が存在する。
- 9 経済的低迷、雇用状況の悪化、男性の収入の相対的悪化が、「結婚相手選択過程」を長期化。
- 10 女性にとっては、結婚後や第1子出産後の就業継続が困難な状況が改善されていない。
- 11 男女とも、「結婚市場の変化」を認識 → 男女の初婚年齢の収斂。
- 12 夫がブレッドウィナーで妻が(準)専業主婦という「片働き」家族から、夫も妻も就労を継続できる「共働き」家族に。



- 13 若い世代の人たちが「共働き」をしながら、「家族形成」がしていくことができると感じる環境の整備が必要。



- 14 「配偶者控除(片働き家族支援)」から「共働き控除(共働き家族支援)」  
「103万円の壁」, 「130万円の壁」の再考
- 15 多様な労働時間、労働環境の整備・導入 → 「育休」, 「育短」, 「在宅勤務」, 「テレワーク」等の導入、普及。
- 16 本当の「男女共同参画社会」の実現 → 男性の家事・育児参加、公的機関・地域社会による「育児支援」, 「子育て」支援。
- 17 企業の「労働慣行」に対する認識の変化。「父親が夕食時に同じ食卓にいる家庭」という概念の定着が必要。

求められる「少子化対策」は、すでに結婚し子どもをもっている人達に対する「次世代育成支援」（「育児支援」や「待機児童問題」、  
「子ども手当の増額・拡大」など）を議論の中心におくことではなく（子育てしやすい社会の形成は必要ではあるが）、



再生産期間の未婚（独身）者が結婚し家族形成しやすくなる環境の整備



結婚後の経済的安定と家族形成環境の確保の両立

結婚後の経済的安定 → 「片働き」から「共働き」へ。結婚・出産後の正規雇用の確保と雇用の安定、男女の非正規雇用の減少。

+

家族形成環境の確保 → 労働慣行の見直し、伝統的性別役割分業の再考、男性の自立、夫の家事・育児支援、地域社会と連動した育児支援、学童保育の拡充、「親育て教育」の実施など  
→ 真の「男女共同参画社会」の実現。



20歳代後半までに「共働き」で結婚することができ、就業継続ができる社会の実現

リプロダクティブヘルスへのサポート → 出産年齢の高齢化に伴う不妊治療の支援、  
リプロダクティブヘルスに係る教育・情報提供の実施。



国，自治体，企業，地域社会の連携

以上